様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月　 ４ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ１５９６０

研究課題名（和文）訪問看護師のコンピテンシーを高める教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of Educaion Program for Visiting Nursing Services

研究代表者
難波　貴代（Namba, Takayo）

首都大学東京・人間健康科学研究科・客員研究員

研究者番号：００４５３９６０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、訪問看護師の能力を高める教育プログラムの開発を目的とした。教育プログラムはフィジカルアセスメント項目で構成され、教育プログラムの実施前後は、すべての項目で実施前と比較すると実施後には、知識及び技術が再確認されていた。訪問看護師は、教育プログラム内容の研修を受けたあと、臨地で実施することが容易であり、予習・復習が可能であり研修内容が継続されていた。また心音のランドマークにシールを貼付できていた訪問看護師は、できない訪問看護師より呼吸音も聴取できていた。今後は、教育プログラム内容を実施し、目標達成した訪問看護師がリーダーとなり、次世代を育成していく組織を確立していくことが重要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義
研究成果は、紙面教育から第三者による評価としてフィジカルイグザミネーションからフィジカルアセスメントの習得を中性能人体模型により可能となり、学術的意義が果たされた。また訪問看護師教育には積極的に活用されていない教材のひとつとして中性能人体模型を活用したことにより、訪問看護師のフィジカルイグザミネーションからフィジカルアセスメント能力の強化を目的とすることが可能となり、社会的意義を果たしたと言える。今後は地域ごとにおける訪問看護師のフィジカルアセスメント強化をしていくことが必要である。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to develop an educational program to improve the ability of visiting nurses.There were significant differences in all items before and after the implementation of the educational program. Before the implementation of the education program, it was judged that the unclear knowledge and skills had been reconfirmed due to the implementation.The visiting nurse can continue the implementation at the visiting nursing station. Visiting nurses can easily review knowledge and skills.The visiting nurse who was able to put the seal on the landmark of heart sounds was able to hear the breath sounds from the visiting nurse who could not, which means that the relationship between the heart and lungs was understood.In the future, it will be important to establish an organization that implements the contents of the educational program and the visiting nurses who have achieved the goals become leaders and nurture the next generation.

研究分野：在宅看護

キーワード：訪問看護師　教育プログラム　フィジカルアセスメント

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日本の訪問看護ステーションでは、人材育成のための教育プログラムが必要である。内閣府では、2025 年には訪問看護利用者が 51 万人と推計され、今後、２から 3 万人の人材を育成していかなければならない。さらに 2025 年に迫る在宅療養者の看取り難民問題に対応するためには、訪問看護師として、若手看護師の育成が急務である。現在のまでのところ、新卒訪問看護師を採用しない訪問看護ステーションは 9 割以上であるものの、新卒訪問看護師を採用希望する訪問看護ステーションが徐々に増えてきている。しかし，訪問看護ステーションを対象とした新卒訪問看護師の受け入れに関する実態調査(長江弘子他，2013)では、新卒訪問看護師を実際に採用した訪問看護ステーションは、わずか 1.4%と非常に少ない。これは教育プログラムがないことを理由として採用に至っていないということであった。また「きらきら訪問ナースの会研究会」(2014)の研修会では、新卒訪問看護師を受け入れた 6 機関の教育体制は経験知からの教育プログラムであり、エビデンスに基づいた内容でなかったと発表していた。新卒訪問看護師を採用している訪問看護ステーションでの教育は、経験知によるものであり、エビデンスのある教育プログラムではなく、機関独自の教育プログラムとなっている。現実的には訪問看護ステーションの半数以上は 5 人未満の事業所が多く、訪問看護師の教育を外部研修に委託せざるをえない課題があり，常勤換算 2.5 人の現状では医療機関のように指導体制を確立することは困難である。また訪問看護では、単独で患者の病態判断を迫られる。そのためフィジカルアセスメントが重要であるが、看護基礎教育に導入されたのは平成 21 年度であるため、それ以前に看護教育機関を修了している場合には、フィジカルアセスメントを履修していない。訪問看護師 OJT ガイドブック(2011)は、学習者を主体とするガイドブックであるが、ケア実施の有無と可否を問うだけであるため、フィジカルアセスメントプロセスが不明、さらに第三者による評価がないことが課題にあげられる。訪問看護師は単独で患者の病態判断を迫られるため、ケア実施の有無と可否ではなく、どうその在宅療養者に対してフィジカルアセスメントを実施し、システマティックに考えた結果の技術獲得が必須となる。しかし、訪問看護師の研修は集団教育で画一的な一定レベルの知識および技術を習得目標にされているため、個々が習得できたかどうかは不明である。フィジカルアセスメントを焦点とした教育プログラムが開発されることで、個々の訪問看護師の質向上が期待できるため、本研究の着想に至った。

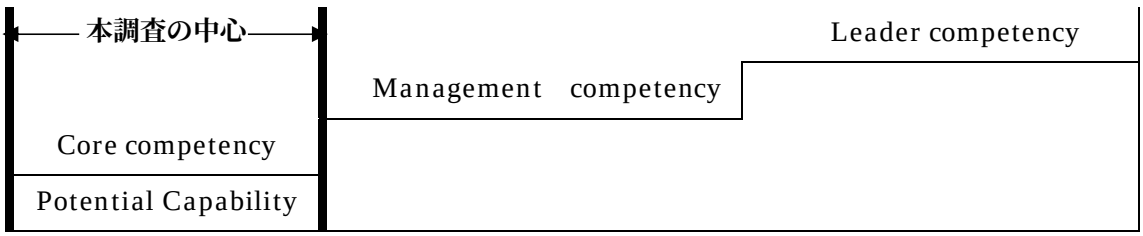
２．研究の目的

本研究は、訪問看護師の能力(以下，コンピテンシーとする)を高める教育プログラムの開発を目的とした。この研究は、訪問看護師のコンピテンシー向上のための教育プログラムを開発し、新卒訪問看護師の段階からシステマティックに教育することにより、単独で在宅療養者の看取りまで適切に対応でき、自律した訪問看護師育成が期待できる。

３．研究の方法

本研究では、訪問看護師のコンピテンシー向上のための教育プログラムを開発することを最終目的とする。

【概念枠組み】



訪問看護師のもつ潜在的能力、いわゆる Potential Capability などの訪問看護経験によってコアコンピテンシーを刺激し、「卓越した実践を行い成果を生み出している訪問看護師（Senior

Nurse)」からの教育あるいは指導、また「段階を見据えた教育体制（Education system）」があってはじめて、次の段階であるマネジメント・コンピテンシー、リーダー・コンピテンシーへと段階を追った育成へと導くと考えた。

４．研究成果

(1)平成 28 年度は、訪問看護ステーションを対象に訪問看護ケア内容の把握、臨地訪問看護師によるヒアリング調査を実施し、訪問看護師のコンピテンシーを高める必要な教育プログラム項目を精選した(第 1 段階)。

教育プログラム内容の項目の精選は、ナラティブ･アプローチを援用した質的記述的研究で得られた項目（難波,金,2015）を参考に、研究協力者である A 訪問看護ステーション 2 機関に勤務する訪問看護師から聞き取り調査を実施し、訪問看護の根幹的能力(特にフィジカルアセスメントに着眼)を念頭に、コンピテンシーに必要な項目を作成(試案)した。

教育プログラム内容は、フィジカルイグザミネーションからフィジカルアセスメントを中心にした身体状態の的確なアセスメント方法の習得（心音、呼吸音など）とした。

(2)平成 29 年度は、コンピテンシーを高める教育プログラム内容の検討後、教育プログラム(試案)のプレテストを実施した(第 2 段階)。

目的訪問看護師のコンピテンシー向上のための教育プログラムを開発することを最終目的とし、平成 29 年度はコンピテンシー向上のための教育プログラムの一部であるフィジカルアセスメントに着眼し、教育プログラムの効果について検討した。研究方法調査対象者は、Y 市 I 訪問看護連絡協議会の 13 施設の訪問看護師を対象とした。教育プログラムは、28 年度に項目を精選し、フィジカルアセスメントを中心に構成されたものである。教育プログラム実施前後に、自記式アンケートを実施した。調査期間は、平成 29 年 4 月 1 日から平成 30 年 3 月 31 日まである。調査内容は、訪問看護師の基礎情報として年齢、資格、性別、勤務場所、フィジカルアセスメント履修および研修の有無とした。分析方法は、教育プログラム実施前後でウイルコクソンの符号付順位和検定を実施した。統計解析には統計パッケージ SPSS(Ver.25)を用いた。倫理的配慮 A 大学の倫理委員会で承認後、実施したものである。結果調査対象者の概要として、訪問看護師の平均年齢は、45.59 歳(SD=7.866)であった。フィジカルアセスメントの履修は、大学あるいは専門・専修学校で履修したに 11 名(25.6%)、履修しなかった 28 名(65.1%)、その他 4 名(9.3%)、教育機関以外でフィジカルアセスメント研修の受講は、病院の新人研修 7 名(24.1%)、看護協会の研修 11 名(37.9%)、病院および看護協会の研修を受講が 11 名(37.9%)であった。フィジカルアセスメント実施前後（表 1）では、本日の目標について認識している(P<0.001)、フィジカルアセスメントの必要性の理解

表 1　教育プログラム	T 値	有意確率
1.本日の目標が認識できた	3.674	P<0.001
2.フィジカルアセスメントの認識が理解できた	2.569	P<0.013
3.フィジカルアセスメントの実施時期が理解できた	13.115	P<0.001
4.五感を使ってフィジカルアセスメントができた	16.948	P<0.001
5.ランドマークが確認できた	12.306	P<0.001
6.ペンライトを使い対光反射等が確認できた	15.906	P<0.001
7.打診法が実施できた	6.556	P<0.001
8.問診方法が理解できた	7.382	P<0.001
9.目と口を観察する意義が理解できた	11.726	P<0.001
10.目と口の観察技術を確認できた	-15.112	P<0.001
11.口腔内の観察ポイントについて記述できた	-3.401	P<0.001
12.心音、呼吸音のランドマークが確認できた	8.293	P<0.001

(P<0.013)、五感の実施(P<0.001)、聴診器の正確な使用(P<0.001)、打診方法について(P<0.001)、目と口を観察する意義を知る(P<0.001)、口腔内の観察ポイントについて記載できる(P<0.001)、心音・呼吸音のランドマーク確認(P<0.001)に有意な差があった。考察今回の教育内容プログラムは、基礎的内容でありフィジカルアセスメントに至るまでのフィジカルイグザミネーションである。教育プログラムを研修した訪問看護師は、6 割がフィジカルアセスメントのカリキュラムを履修していなかったが、卒後教育において 9 割の訪問看護師はフィジカルアセスメント研修は受講されていた。今回の実施前後にすべての項目で有意な差があったのは、実施前には不明瞭な知識や技術が、実施したことにより再確認がなされたと判断した。また研修後早急に臨地で実施が継続可能であるため知識や技術の習得が容易に復習可能であることも推察された。結論今後は、フィジカルイグザミネーションからフィジカルアセスメントへの継続研修を段階的に計画し、訪問看護師の質向上に努めていくことが重要である。

(3)平成 30 年度の計画は、訪問看護師のコンピテンシーを高める教育プログラム開発(第 3 段階)

①訪問看護師のコンピテンシーを高める教育プログラムの本実施をした。仮説は心音のランドマークが理解されている訪問看護師は、心音や呼吸音の正常、異常が認識できるとした。研究方法調査対象者は Y 市 I 訪問看護連絡協議会 13 施設の訪問看護であり、教育プログラムに参加した者を対象とした。教育プログラムは 28 年度に項目を精選し暫定案を作成し、その後、さらに精選したものである。調査期間は、平成 30 年 11 月 1 日～平成 31 年 3 月 31 日である。調査内容は、訪問看護師の年齢、フィジカルアセスメントの履修、教育プログラム項目のフィジカルアセスメントの理解などである。分析方法は単純集計し、データから全体像を把握し、仮説を立証するためにχ^2検定を実施した。統計解析には統計パッケージ SPSS（Ver25.0）を用いた。倫理的配慮は、A 大学の倫理委員会で承認後実施したものである。結果調査対象者は 29 名であった。教育プログラムのフィジカルアセスメントの理解に対する評価は、心音のランドマーク（4 領域）に適切な位置にシールを貼付できたに 22 名（75.9%）であった。しかし心音の正常か、異常かという聴取については、できないが 22 名（75.9%）であった。呼吸音の気管支呼吸音や肺胞呼吸音については、80%以上の訪問看護師ができたあと回答していた。しかし、呼吸音の副雑音の聞き分けは、できないと回答した者が 50%以上を占めていた。さらに心音のランドマーク（4 領域）にシールを適切な位置に貼付できる訪問看護師より有意に呼吸音の副雑音について聴取できた（P＜0.05、$\chi 2$＝2.5891）。これらの結果、仮説は一部採択されたものの、ほとんどの項目が棄却された。考察心音のランドマークを理解されている訪問看護師は、呼吸音の副雑音の聞き分けができていた。特に心音のランドマークが確認できている訪問看護師は、呼吸音については 80%以上の訪問看護師が正常呼吸音について聴取することができていたものの、副雑音の聴取が不明であった。これらは今後も継続して呼

表 2　呼吸音の分類と心音の理解の関連（χ2 検定）

呼吸音分類 ＼ 心音の理解		できた	できない	χ2 値と P 値
1．低調性連続副雑音（いびき様）	できた	15(88.2%)	2(11.8%)	χ2 値＝7.128a
	できない	5(41.7%)	7(58.3%)	P<.014
2．高調性連続副雑音（笛様）	できた	18(85.7%)	3(14.3%)	χ2 値＝4.035a
	できない	4(50.0%)	4(50.0%)	P<.045
2．粗い断続性副雑音（水泡音）	できた	18(69.2%)	8(30.8%)	χ2 値＝.0089a
	できない	2(66.7%)	1(33.3%)	P<1.000
3．細かい断続性副雑音（捻髪音）	できた	17(68.0%)	8(32.0%)	χ2 値＝.079a
	できない	3(75.0%)	1(25.0%)	P<1.000

吸音の聴取に焦点をあてたトレーニングをしていく必要がある。また心音のランドマークにシールを貼付することができた訪問看護師は、できない訪問看護師より副雑音が聴取できていたということは、心臓と肺の関連性が理解されていると考える。今後は、教育プログラム研修の目標が達成できた訪問看護師が、リーダーシップをとり、次世代育成を育成していくことが、その地域での訪問看護ステーションに勤務する訪問看護師の質向上につながると考える。

(4)R1（H31：延長）年度の計画は、教育プログラムを実施済みの訪問看護師が勤務する訪問看護ステーションを利用する利用者に対して満足度調査を実施した。仮説は、教育プログラムの研修を受けた訪問看護師は、利用者が訪問看護を利用する前に比べて、身体の状態が安定したり、苦痛や症状が和らいだりした。研究方法調査対象者はＹ市Ｉ訪問看護連絡協議会２施設を利用している利用者および介護者を対象とした。調査期間は、R1 年 8 月 1 日～R1 年 12 月 31 日である。調査内容は、利用者満足度の調査項目の選定は、島内らの作成した満足度評価票 14 と Bonnie,L.W の Home Care Client Satiscation Instrument(HCCSI)（Bonnie L.Westra,Laura Cullen,et al.,1995）を研究者が一部加筆、修正し 20 項目を作成した。それらの項目について、4 段階でたずねた。分析方法は単純集計し、データから全体像を把握し、仮説を立証するために χ^2 検定を実施した。調査票は郵送による 2 週間の留め置きとした。121 名を対象とし、返送されたのが 65 名であった。結果調査対象者の概要として、65 歳から 75 歳未満の利用者より、75 歳以上の利用者は最近 3 か月以内に転倒していないに有意な差（P<0.043）であった。緊急時訪問看護サービスを受けている利用者は、緊急時訪問看護サービスを受けていない利用者より、「看護師は、本人の身体の状態が変化したときや困っていることがあった場合は、すぐに対応してくれる」に有意な差（P<0.033)、「看護師は、医師と相談した内容をすぐに本人・家族と共有してくれる」に有意な傾向（P<0.071)、「看護師は、今後の身体の状態の見通しについて、本人と家族にわかる言葉で説明してくれる」に有意な傾向（P＜0.075）がみられた。「看護師は、今後に起こりうる新ｔ内の変化を予防するために、先を見越してかかわってくれる」に有意な差（P<0.031 ）、「看護師は、身体の状態が悪化した時や症状がでたときの本人や家族ができる対処方法を事前に説明してくれる」に有意な差（P<0.01）であった。「訪問看護を利用する前に比べて、本人が自宅での生活に自信をもつことができた」に有意な差（P＜0.039）であった。

考察緊急時訪問看護サービスを利用している利用者は、訪問看護師が身体状態の変化や困惑した時の対応、また医師と相談した内容を家族と情報共有、訪問看護師が利用者や介護者へのわかりやすい説明に緊急時訪問看護サービスを受けていない利用者より、有意な差があった。これは緊急時に身体状態がどのような状態なのかアセスメントが必要となる。そのため訪問看護師のフィジカルアセスメント能力によるものと判断した。今後は、教育プログラム内容を実施し、目標達成した訪問看護師がリーダーとなり、次世代を育成していく組織を確立していくことが重要である。外部研修者に依存するのではなく、訪問看護師自らが教育体制を確立していくことが重要である。そうすることにより医療費高騰の削減につながり、さらに多職種の連携となり地域包括ケアシステムの推進につながっていくと考える。

引用・参考文献

Bonnie L. Westra , Laura Cullen , et al ., Deve1Qpent of the Home Carc Client Satisfaction Instrument , Public Ilealth Nursing , 1995 . 12 (6), 393-399 .

長江弘子,吉本照子,辻村真由子,松永敏子,山木まさ,星野恵美子他(2013.8). 新卒訪問看護師育成プログラムの開発と概要,訪問看護と介護,Vol.18. No.8,pp624-631.

難波貴代, 金壽子（2015.3）新卒訪問看護師の神奈川県版キャリアパスの構築（第１報）関する研究, 神奈川県立保健福祉大学報告書

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 難波貴代
２．発表標題 訪問看護師のコンピテンシーを高める教育プログラムの開発－第1報－
３．学会等名 第38回　日本看護科学学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 難波貴代
２．発表標題 訪問看護師のコンピテンシーを高める教育プログラムの開発－第2報－
３．学会等名 第39回　日本看護科学学会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	織井　優貴子 (Yukiko Orii) (50285681)	首都大学東京・人間健康科学研究科・教授 (22604)	